様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １０ 日現在

機関番号：１７３０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３５０１１１１

研究課題名（和文）大学におけるコミュニケーション教育の総合的カリキュラムの開発とＦＤへの展開

研究課題名（英文）The development of a college-level integrative curriculum of communication education toward faculty development

研究代表者
山地　弘起（YAMAJI, Hiroki）

長崎大学・大学教育イノベーションセンター・教授

研究者番号：１０２２０３６０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,100,000円

研究成果の概要（和文）：大学教育において、対人関係や言語表現、情報活用などの基本技能の訓練を越えた、共生への批判的・創造的コミュニケーション力の総合的な教育プログラムを提案するため、コミュニケーション学と学習科学（とくにアクティブ・ラーニング）の知見を応用しながら、身体・感情、認知・言語、メディア・ICT、社会・文化の４領域での事例調査とモジュール開発を行い、それらを踏まえた総合的カリキュラムを試行するとともにＦＤテキストを制作した。

研究成果の概要（英文）：To propose a college-level integrative curriculum of critical and creative communication that expands the scope of basic skills training in interpersonal relations, language, and ICT use, this project applied research in communication studies and learning sciences for case survey and module development in four major domains (body and emotion, cognition and language, media and ICT, and society and culture), thereby designing a pilot program of an integrative curriculum as well as producing a faculty development textbook.

研究分野：教育心理学

キーワード：大学教育　コミュニケーション教育　カリキュラム開発　ＦＤ

１．研究開始当初の背景

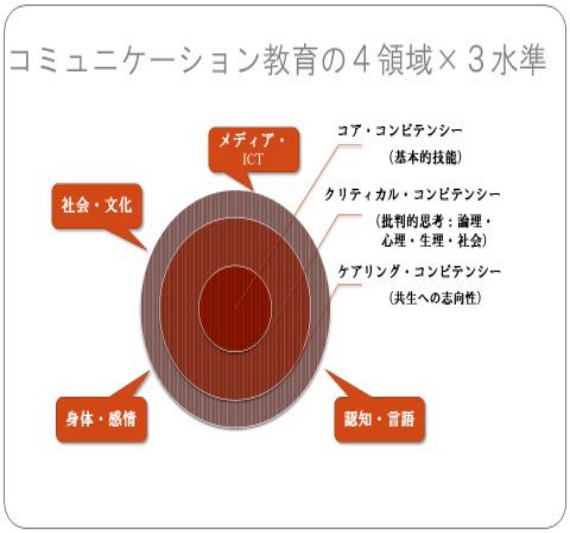
(1)　近年、高等教育のユニバーサル化に伴う諸現象のなかでも、特に学生のコミュニケーション力の低下が問題となっている。コミュニケーション力は、高等教育の質保証の文脈であげられてきた「社会人基礎力」（経済産業省）や「学士力」（文部科学省）、あるいはOECD のAHELO（Assessment of Higher Education Learning Outcomes）プロジェクトなどで明示される 21 世紀型ジェネリックスキルの中核を成すものとして、今やその育成が喫緊の課題となった。初等中等教育においても、全教科を通じた「言語力」の育成を通じて思考力や学習技能を高める方向が打ち出されており、そこではコミュニケーション力向上と学力向上との密接な関連が前提とされている。

(2)　より広い文脈においても、今後の社会生活の鍵となるコンピテンシー（能力、技能、動機づけ等の統合概念）を検討した DeSeCo 報告（2003 年）において、３つのコミュニケーション力が強調されている。第一は、「多様な人々との効果的相互作用」であり、他者との協調や多文化状況での葛藤調整に関わるものである。第二は、「自律的な行動」であり、家庭や地域、職場等において自分の目標や計画を明確化するとともに、権利や関心を擁護・実現するエンパワーメントに関わるものである。そして第三は、「双方向媒体の有効活用」であり、言語や情報、知識といった社会文化的道具、及びコンピュータほかのデジタルツールの活用に関わるものである。以上の三者は密接に関連し、批判的思考と反省的実践の態度がこれらを通底する要件とされている。

２．研究の目的

(1)　以上から伺われるように、急速なグローバル化とユニバーサル化の双方に対応しなければならない今日の大学では、本格的なコミュニケーション教育が必須の課題となっている。しかし、現在の多くの大学でのコミュニケーション教育は、対人関係や言語表現、情報活用など最低限の基本技能に留まっていることが通常で、上記のジェネリックスキルに要請される批判的・創造的なコミュニケーション力までを対象としたものとは言い難い。今後望まれるコミュニケーション教育を国際通用性の高い内容と方法によって実現できるような、モデル･カリキュラムの開発が望まれる所以である。

(2)　そこで本研究では、下図に示すように、コミュニケーション教育の内容を「身体・感情」「認知・言語」「メディア・ICT」「社会・文化」の４領域に分けたうえで、基本的技能（コア・コンピテンシー）、批判的態度と技能（クリティカル・コンピテンシー）、共生への態度と技能（ケアリング・コンピテンシー）の３水準に整理して開始した。



(3)　以上の基本的枠組に基づいて、本研究は、コミュニケーション学と学習科学（とくにアクティブ・ラーニング）の知見を応用しながら次の 3 課題に取り組み、大学のコミュニケーション教育の変革に資することを目的とした。

①国内外の大学におけるコミュニケーション教育の現状把握と課題の抽出
②国際通用性の高いコミュニケーション教育の方法の開発と評価
③コミュニケーション実践に焦点をおいた授業開発と学習指導のための FD テキストの制作

３．研究の方法

(1)　本研究の期間を４年間とし、初年次に国内外の大学におけるコミュニケーション教育の現状把握と課題抽出、２年次にコミュニケーション教育の４領域×３水準のモジュール開発と試行・評価、３年次に総合的カリキュラムの開発と試行・評価、最終年度に以上を総括し、FD プログラムの開発及びテキスト制作を計画した。

(2)　研究組織は、コミュニケーション教育の４領域それぞれを専門分野とする４名で構成し、海外の事例調査等を十分に踏まえて国際通用性にも優れたカリキュラム開発を目指した。

(3)　総合的カリキュラムの開発と試行に関しては、おもに研究代表者の所属大学においてコミュニケーションに関する教養教育科目群を設定し、アクティブ・ラーニング手法を様々に活用した半期単位のアクション・リサーチを行った。

４．研究成果

(1)　国内外の大学におけるコミュニケーション教育の現状把握と課題抽出のために、国内及び米国の大学についてウェブ上の資料

や教育改善関連の報告書から全体的な状況を把握した。そのなかで特に、アクティブ・ラーニングの過程が学修文脈のなかで機能的なコミュニケーション教育ともなっている点に着目し、国内外の訪問調査を行った（山地・劉・橋本・川越・橋本、2013；山地・川越、2012）。

(2)　コミュニケーション教育の４領域×３水準のモジュール開発に関して、各研究分担者は１領域３水準を担当し、先行事例調査を行うとともに、担当授業の一部や関心ある学生グループにおいて試行と評価を行った。

「身体・感情」の領域に関しては、米国身体心理療法学会や欧州身体心理療法学会で海外の身体心理教育の現況を把握するとともに、「身体関係論」の半期対面授業及び「身体コミュニケーション」の集中遠隔授業を試行した。また、演劇やサイコドラマ等を介した原初的なコミュニケーション体験の意義を、医療や教育、異文化間といった諸分野のコミュニケーション教育のなかで確認した。

「認知・言語」の領域に関しては、欧州、特にドイツにおいてコミュニケーション力向上を目指す日本語教育を実施しているベルリン日独センターと国際交流基金ケルン文化会館を訪問調査するとともに、留学生及び日本人学生のための異文化コミュニケーション及び日本語の共修科目を改善し、より総合的な「コミュニケーション研修」「人間関係論」等を社会教育と連携させて実施した。

「メディア・ICT」の領域に関しては、特に英語教育との関連で、ナラティブ分析によって英語上級者のコミュニケーション力の自己育成に真正性のある問題解決実践が鍵となることを明らかにし、またフィールドにおいても、大学生の海外協働研修が様々な媒介因の経験（メディアプレゼン、オープンハウス、日本語教育補助員、授業聴講）を介して総合的なコミュニケーション力向上につながっていたことを確認した。

「社会・文化」の領域に関しては、タイのチュラロンコン大学等の日本語専攻学生を対象とした日本のサブカルチャーに関するフィールドワークを実施するほか、メディア文化の初学者のためにメディアツールやウェブコンテンツを使用する方法論の検討を行い、教材として使用可能なコンテンツを実際に用いて実施した授業のセルフ・エスノグラフィーを行った。

(3)　上記を踏まえた総合的カリキュラムの開発にあたっては、おもに研究代表者の所属大学における科目群の試行を通して、ワークショップ型体験学習による身体コミュニケーション力の向上、ドラマ形式による日本語力及び異文化コミュニケーション力の向上、メディアツールやメディア文化コンテンツを使用した文化的コンピテンスの向上、そして真正性のある問題解決実践としてのメディア制作を通したICTスキルの向上等を目指した。

(4)　以上のアクション･リサーチをもとに、共生社会に向けたコミュニケーション教育のためのFDテキストの制作を行った(山地、2015)。その内容は、アクティブ・ラーニングへの導入を兼ねて、生物学・心理学・人類学からの「ヒトを学ぶ」、身体表現・音表現・言語表現のワークショップ型授業による「体験から学ぶ」、そしてフィールドワークやPBL（Project-Based Learning）を活用した「メディアを学ぶ」の3部から構成している。

併せて、大学教育学会ほかでワークショップ形式のFDを試行した。

(5)　本研究の意義は、大学教育において、対人関係や言語表現、情報活用などの基本技能の訓練を越えた、共生への批判的・創造的コミュニケーション力の総合的な教育プログラムを提案したことにある。高次のアクティブ・ラーニングを取り入れた授業事例としても、今後の大学教育改善に寄与するものと期待される。

しかし、本研究を遂行する過程で、学生自らが日常棲みこんでいる対人関係文化を自覚化し相対化することがなければ、学習課題が「問題化」することはなく学習意欲にも繋がらない、という限界が痛感された。この点を考慮すると、共生社会に向けた批判的・創造的コミュニケーション力の育成には、少なくとも以下の3つの課題に継続して取り組む必要がある。

①現代日本の学生たちは、他者との繋がりに過剰に配慮し排除を恐れる日常に生きているようであり、対人コミュニケーション力の教育には彼らの棲み込んでいる対人関係文化の深い理解が不可欠である。

②共生社会においては、対人関係のなかでも特に対人葛藤の建設的調整や社会文化的葛藤解決への建設的関与（アクティブ･シティズンシップ）が求められるため、そこでのコミュニケーション力の内容とその教育指針をさらに明確にする必要がある。

③共生に向けた批判的･創造的コミュニケーション力をいかに評価するかは、今後の学修成果の可視化の大きな課題となる。様々なコミュニケーション･メディアの中で生活する今日、生態学的妥当性の高い評価指標の作成は容易ではないため、質的研究と量的研究を柔軟に組み合わせながら検討していく必要がある。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計１０件）

① Gehrtz 三隅友子・大橋眞、共生社会を支える教養教育の可能性Ⅰ-パフォーマティブ・ラーニングを導入する-、徳島大学国際センター紀要、査読無、11 号、2015、pp.1-10

② Gehrtz 三隅友子、Project-based learning in Japanese language education featuring drama and community involvement.、第 18 回ヨーロッパ日本語教師学会論文集、査読有、18 巻、2015、pp.25-30

③ Yamaji, H.、Does mindfulness cultivate social connectedness? A narrative review on a novel modality of social emotional learning.、長崎大学大学教育イノベーションセンター紀要、査読無、5 号、2014、pp.67-88

④ Gehrtz 三隅友子・保坂敏子、映像作品を利用した構成主義に基づく授業デザイン、徳島大学国際センター紀要、査読無、10 号、2014、pp.1-10

⑤ Gehrtz 三隅友子、地域の国際化を目指す高大連携の可能性Ⅱ-とくしま異文化キャラバン隊の活動を通して-、徳島大学国際センター紀要、査読無、10 号、2014、pp.35-49

⑥ 山地弘起・劉卿美・橋本優花里・川越明日香・橋本健夫、米国における教養教育改革の事例 ―ワグナー大学・イーロン大学・アルバーノ大学・IUPUI の訪問調査報告―、 長崎大学大学教育機能開発センター紀要、査読無、4 号、2013、pp.23-37.

⑦ Gehrtz 三隅友子・大橋眞、交流と対話を通した学内の連携を考える-「異文化交流の体験から何を学ぶのか」と「日本事情Ⅳ」の連携-、徳島大学国際センター紀要、査読無、8 号、2012、pp.31-43

⑧ Gehrtz 三隅友子・保坂敏子・門脇薫、映像作品を利用した日本語教育の体系化に向けて、徳島大学国際センター紀要、査読無、8 号、2012、pp.47-59

⑨ 山地弘起・川越明日香、国内大学におけるアクティブラーニングの組織的実践事例、長崎大学大学教育機能開発センター紀要、査読無、3 号、2012、pp.67-85

〔学会発表〕（計３１件）

① 山地弘起・西田治・谷美奈、体験工房：ミュージッキング＆ライティングによる新たなコミュニケーション教育の可能性（ラウンドテーブル）、大学教育学会第 37 回大会、2015 年 6 月 6 日、長崎大学（長崎県長崎市）

② Gehrtz 三隅友子、留学生との交流による多文化共生のまちづくり-とくしま異文化キャラバン隊の活動を通して-、日本語教育学会四国地区第 7 回研究集会、2014 年 11 月 8 日、鳴門教育大学（徳島県鳴門市）

③ 保崎則雄・藤城晴佳・加瀬隆史、身体・言語というメディアの有機的なつながりによるコミュニケーション活動の促進、第 40 回全日本教育工学研究協議会全国大会、2014 年 10 月 25 日、京都テルサホール（京都府京都市）

④ Hozaki,N., & Izawa, R. Analysis of an online course “Fundamentals of Effective Presentation”in terms of students’ attitude and messages on the discussion board. 12th International Conference for Media in Education、2014 年 8 月 25 日、ソウル(韓国)

⑤ 山地弘起・橋本優花里・西田治・Gehrtz 三隅友子・保崎則雄、教養教育におけるコミュニケーション教育－音表現・脳科学・心理学から－（ラウンドテーブル）、第 20 回大学教育研究フォーラム、2014 年 3 月 19 日、京都大学（京都府京都市）

⑥ 山地弘起、コミュニケーションの土壌を探る－外舞台と内舞台の人間模様－（招待講演）、情報コミュニケーション学会第 11 回全国大会、2014 年 3 月 2 日、長崎大学（長崎県長崎市）

⑦ 田中東子、サブカルチャーを／で”学ぶ”－メディアコンテンツを使いながら授業を行うためのノウハウ（招待講演）、日本語教育学会アカデミック・ジャパニーズ・グループ第 32 回研究会、2014 年 2 月 7 日、東京海洋大学（東京都港区）

⑧ Gehrtz 三隅友子・竹内利夫、絵の身になって鑑賞しよう－よーい、アクション！－、国際表現言語学会第 5 回大会、2013 年 12 月 23 日、四国学院大学（香川県善通寺市）

⑨ 山地弘起、身体への基本的信頼とアウェアネス－尺度作成の試み－、日本心理学会第 77 回大会、2013 年 9 月 20 日、札幌

市産業振興センター（北海道札幌市）

⑩ 北村史・長濱澄・保崎則雄、協働的な活動を軸にした大学生の海外研修において養われる資質について、外国語教育メディア学会第 53 回全国研究大会、2013 年 8 月 9 日、文京学院大学（東京都文京区）

⑪ 田中東子、娯楽メディアの社会的責任、日中三大学合同シンポジウム第 1 回（メディアの社会的責任）、2013 年 6 月 23 日、早稲田大学（東京都新宿区）

⑫ 山地弘起・田中東子・Gehrtz 三隅友子・保崎則雄、教養教育におけるコミュニケーション教育の充実に向けて（ラウンドテーブル）、第 19 回大学教育研究フォーラム、2013 年 3 月 15 日、京都大学（京都府京都市）

⑬ Gehrtz 三隅友子・竹内利夫、美術作品を通した学習の可能性-日本語教育と美術鑑賞教育の協働-、第４回協働実践研究会、2012 年 10 月 20 日、政策研究大学院大学（東京都港区）

⑭ Gehrtz 三隅友子・大橋眞、交流と対話を通した学内の協同・連携を考える、日本協同教育学会第９回全国大会、2012 年 9 月 22 日、日本歯科大学（新潟県新潟市）

⑮ Yamaji, H.、Does mindfulness cultivate social connectedness? A literature review、欧州身体心理療法学会第 13 回大会、2012 年 9 月 14 日、ケンブリッジ（英国）

⑯ 井上千以子・角山剛・山地弘起・安永悟・柴原宜幸、心理学教育は学生の「書く力」をいかに支援できるか（ワークショップ）、日本心理学会第 76 回大会、2012 年 9 月 11 日、専修大学（神奈川県川崎市）

⑰ Gehrtz 三隅友子、映像作品を利用した日本語教育と授業デザイン-授業を通した気づき-、ICJLE 日本語教育国際研究大会、2012 年 8 月 19 日、名古屋大学（愛知県名古屋市）

⑱ 長濱澄・保崎則雄・北村史、口唇動作映像が英語学習者の発音習得に期待される効果、外国語教育メディア学会第 52 回全国研究大会、2012 年 8 月 7 日、甲南大学（兵庫県神戸市）

⑲ 丹羽量久・山地弘起・藤井美知子、能動的学習に誘導する授業のデザインと実践、情報コミュニケーション学会第 9 回全国大会、2012 年 3 月、青山学院大学（東京都渋谷区）

⑳ 保崎則雄、ライフストーリーから分析する英語上級者における学習、維持の様相、外国語教育メディア学会第 127 回関東支部研究大会、2011 年 11 月、拓殖大学（東京都文京区）

㉑ 保崎則雄・鈴木広子・山地弘起・北村史、伝える、教える、言葉・身体、メディアの活用（ラウンドテーブル）、日本教育方法学会第 47 会大会、2011 年 10 月、秋田大学（秋田県秋田市）

㉒ 清水亮・橋本勝・山地弘起、学生・職員と創る大学教育：ＦＤ・ＳＤの新発想（ラウンドテーブル）、初年次教育学会第 4 回大会、2011 年 8 月、久留米大学（福岡県久留米市）

㉓ 保崎則雄、海外協働研修：複雑な現実の状況から学ぶ、外国語教育メディア学会第 51 回全国研究大会、2011 年 8 月、名古屋学院大学（愛知県名古屋市）

〔図書〕（計３件）

① 山地弘起編著、ナカニシヤ出版、かかわりを拓くアクティブ・ラーニング、2015、190

② 山地弘起他、ナカニシヤ出版、学生と楽しむ大学教育：大学の学びを本物にする FD を求めて、2013、pp.216-232

③ 山地弘起・橋本健夫編著、ナカニシヤ出版、学生の納得感を高める大学授業、2012、200

６．研究組織

(1)研究代表者

山地　弘起（YAMAJI, Hiroki）
長崎大学・大学教育イノベーションセンター・教授
研究者番号：１０２２０３６０

(2)研究分担者

保崎　則雄（HOZAKI, Norio）
早稲田大学・人間科学学術院・教授
研究者番号：７０２２１５６２

三隅　友子（MISUMI, Tomoko）
徳島大学・国際センター・教授
研究者番号：２０３２５２４４

田中　東子（TANAKA, Toko）
十文字学園女子大学・人間生活学部・准教授
研究者番号：４０３３９６１９